

日本医療検査科学会 第55回大会

2023

10/6 金 12:00 ~ 12:50

会場

第10会場

(パシフィコ横浜 会議センター 315号室)

臨床検査情報の利活用に向けた
標準化活動：共用基準範囲とJLAC

座長

岡田 美保子 先生

一般社団法人 医療データ活用基盤整備機構 理事長

演者

康 東天 先生

九州大学 名誉教授

本セミナーは、整理券制です。

■配布場所：会議センター 3F（ホワイエ）整理券配布所

■配布日時：10月6日 8:00~10:00

※整理券はセミナー開始と同時に無効となりますので、ご注意ください。

共催

日本医療検査科学会第55回大会

株式会社 シノテスト

臨床検査情報の利活用に向けた標準化活動： 共用基準範囲と JLAC

康 東天 先生

九州大学名誉教授、香椎丘リハビリテーション病院
一般社団法人 医療データ活用基盤整備機構 (IDIAL)

(1) 基準範囲の標準化：共用基準範囲

少し古いですが2015年の日臨技サーベイによると、どの検査項目においても100前後の基準範囲が使用されている。このような状況を打破するため、基準範囲共用化委員会を日本臨床化学会、次いでJCCLSに立ち上げ、2014年3月31日に共用基準範囲を公表した。共用化委員会は3つの大規模基準範囲プロジェクト、すなわちIFCCによるアジアプロジェクト、日臨技全国プロジェクト、そして福岡5病院会プロジェクトを合わせて、約9000名にも上るこれまでにない圧倒的多数の基準個体データを統一的に統計処理し、日本全国で共通して使用できる基準範囲を策定した。現在、全国で約40%程度の施設で採用されるに至っており、まだまだ不十分であるが、既に単独の基準範囲としては最も利用されているものとなっている。

今後の課題として項目の増加、小児/高齢者の共用基準範囲の策定が望まれているが現行方式ではこの両者はともに経済的、労力的観点から達成が非常に困難である。有力な解決策の一つは間接法と呼ばれる医療ビッグデータの統計処理による基準範囲の計算である。基準範囲のゴールドスタンダードは基準個体を集める直接法であるが、前期まで私もメンバーであったIFCCの基準範囲委員会(C-RIDL)では、その策定の容易さから間接法が強く意識されている。

(2) 臨床検査項目コードの標準化

大規模医療情報データベースの活用の重要性はますます増している。データはコードを付加されコンピュータサーバーに格納されることで、データの抽出と利用が可能になる。中核的データの一つである臨床検査データの比較可能な統一的コードの実装が遅れている。データベースコードとしての不十分な日本の標準コードとされるJLAC10を改訂したJLAC11の作成の経緯と実装へ向けた取り組みとともに、JLAC利用の実例についても紹介する。